

ひとつは、国際的な必然性です。今、世界的には大交流時代が始まっています。1970年には1億6000万人だった外国旅行者数は、昨年には8億4200万人となっています。テロや紛争など、様々な阻害要因が多発している一方で、人々はより自由に幅広く世界を旅する時代となっているのです。さらに、2010年には10億人、2020年には15億6千万人になる予測されていますが、そのひとつの根拠として、アジア諸国が動き出していることがあげられます。WTOの予測では、2020年頃には中国人外国旅行者数が1億人になるとされています。私は、この動きを十数年前に「観光ビッグバン」と捉えましたが、こういう大きな動きがすでに起こっているのです。

このような中で、アジアの諸都市は、すでに観光ビッグバンへの対応を図っています。例えば、韓国のインcheonにできた国際空港はフル稼働時には4000m級の滑走路が4本、上海の第二国際空港も4000m級が4本になるなど、アジア諸都市では大規模空港建設が進んでいます。昨年中国に行きましたが、地方空港でも次々と整備が進んでいます。一方、日本をみると、成田空港は4000m級が1本、関西国際空港で3500mが1本、中部空港で3500m級が1本と、物理的に取り残されざるを得ない状況です。

また、現在スーパーエアバス「A380」という総二階構造の超大型ジェット旅客機のテスト飛行が行われています。これをすべてエコノミーとすると850人乗ることが可能なこれまでの常識を破る超大型旅客飛行機で、中国やアラビアの航空各社は発注していますが、JAL・ANAは現在のところ1機も発注していない。

このように、観光をめぐるのは、日本人の認識は大きく遅れを取っているところです。日本人の鈍感な世界認識とは裏腹に、より多くの人により自由に世界を動く時代、とくにアジアの人々の大きな動きが起こる時代が近いうちに訪れるのです。

#### ■いまなぜ観光立国か？ ②国内的な必然性

もうひとつは、国内的な必然性です。

少子高齢化により、日本の地域社会は大きく衰退しつつあります。2005年に経済産業省が発表した地域経済規模予測によると、一部地域と大都市を除くすべての地域において、2030年には大幅に地域経済の規模が縮小するとなっています。北海道は、最も大きく経済規模が縮小する地域です。大都市圏では、ある程度人口を吸収し経済規模を維持できることが予測されていますが、札幌市だけは、2030年に経済規模が縮小すると予測されています。40数パーセントの縮小率というワースト1の地域も北海道、ワースト5にも北海道の3つの地域が入っています。夕張だけの問題ではなく、北海道そのものが今後厳しい状況におかれるという予測が出されている。しかし、道産子はまったくそれを気にしていないように感じます。少なくとも重要な立場にある方々は気にしていただかないと、相当厳しい状況になるでしょう。なぜかという、全国レベルで見たとき、北海道は少子高齢化が10年先んじて進んでいるからです。

しかし、逆に考えると、日本の先導的地域になれるということですから、恐れることはありません。北海道こそが日本の未来に対して重要なモデルを提示すべきなのです。そこで、具体的にどう地域の活性化を維持していくかということですが、定住人口が減るので、一人でも多くの交流人口をひきつけることが重要なポイントとなります。

#### ■人間再生の必要性

もうひとつ、人間再生の問題もコインの表裏と考えています。単に地域経済規模の縮小だけでなく、日本全体で人間性そのものに様々な問題が起こっています。かつて日本人の美德であった勤勉・儉約・貯蓄がすでに大きく傷ついている。非常に高かった貯蓄率は、今は顕著に衰えています。勤勉も儉約もそうです。ケニアのマータイさんという政治家によって見直された「もったいない」という言葉が世界語になっていますが、これは日本人こそが世界に向かって発信すべきだったと思います。

観光との関係でとらえると、「GNPからGNHへ」ということがいえるでしょう。Hはハピネスの意味です。日本はGNP志向で「経済は成長し続けなければいけない」といわれていますが、本当に経済が伸びなければ人間